



神樂隨筆

涉園漫錄

全

15  
671





門 1 曾 5  
番 671  
卷

神志徳象... 盆香... 東山... 大坂... 手跡... 日本... 火... 子... 盆... 幅... 廣... 記... 何... 何... 何...





神楽徳子 第一小川京作幸充録

種文庫

神楽徳子

堆集果々香盆等ノ底ノウラニ作者ノ名ヲ  
彫付テ有揚茂張成ノ類ナリ是ハ東山及御物ニ  
集テカフ能ハ活相何カ極テ彫付テ有也夫故ニ  
手跡日本也此彫付ルハ心刀ノサキニテハナラズ前  
ノ牙ノ尖リニテハナラズナリ

ハ子メ盆ト云ハ黒塗ノ四角ナリ七寸四方程ナリ  
フナノ幅廣キ盆也

埴尻別記 第一 尾が天香信景記本系凡二百卷許リ  
向十香或十種香といふハ何色を系とする也  
是云即海を扱ふる系



梅檀 沉水 麝香 薰陸 鬱金

白膠 青木香 零陵 甘松 雞香 釘

老人雜詠 老人江村專科講義具業醫 生寛文四年六月没佛百歳也 元禄八年

香炉のたき香をさるるのつらさうの思を身にて  
故長笛ふま坪とよ念と香脚とをさるる  
科理はじいしさいはをさるるの思を身にて  
係子とをさるるときも也 于時上もふまはるる  
香をたきたの神より懐か入と煙をたき  
神よりか たきかたきを懐中しし次の人へ  
廻る所のあつた合のふまを説きつづき聞え  
たし神より入てたき出するの思ありしなり

志をたきて煙をたきしつづきたき一煙のふまを香  
煙ふまをたきふまをたきの上あ御手は小  
まをたきまのふまをたきしつづきたき  
五行六人あつた六行の香をたき入る也たき  
二つ四つあつたふまをたきしつづきたき  
又あつたふまをたきしつづきたき  
四つあつたふまをたきしつづきたき  
香をたきしつづきたき  
法也し香をたきしつづきたき  
司のふまをたきしつづきたき  
よ  
心得あるふまをたきしつづきたき



て香炉をききて香をたぐくはる煙の量  
物きたるぬほり

檜根は香炉の葉の葉の或と志世流の  
木の葉の葉と葉の葉と葉の葉と  
師侍の葉の葉の葉の葉の葉の葉  
るにに流從實の葉の葉の葉の葉  
とととととととととととととととと

二川隨筆

花屋山川素石翁  
序者青山玄集

享保十歳乙巳春三月

洞川之齋

忠貞社な熊を

者え本葉

道成崎の風流をたつや 如長流表の異

國船の津のおくふ何れも改りて

伝の物をたぐくはる煙の量 中とあらん

物きたるぬほり

一〇二有より一眞は師の表とととと

相設一人は師の表とととと

伽藍の木木伝より木木と木木と

二をとりてお節松の煙の量



初むと役人とはより和しり被伽施の末を  
本末とせり公を細川中家の役人となし其後を  
分る身はうね役思辨し大本の正及點を  
高の正をれの本末乃ゆき方を明し  
同し本末のよこよぬありとて眞は  
い本を乃ちあるとありていして正に満  
少なし眞は眞は役を打果しゆ小  
大末を細く腰かに帯りて右し腰が上  
切腹をせしむる三斎團つん座る凡某  
乃き公にお波を并し六切腹すくま  
いられおしとて彼お役乃子供をらむ

必きと越おおをゆかすともて即かニ移く  
眞は眞を過伐はゆりしれゆ五左忠をれり  
別業おなく物作しりて外之斎斬を  
多ししりゆ五左忠をれ然後之況に其が  
牙之回忌おなひりり殉死をとげてゆき  
思ふ満つんとてかごとあ部小電りり  
舟園心お停ゆえ切腹をゆきし小飛りり  
かくてそりおぬりりかか舟お山の西の藤十  
間田おおゆひをゆしゆ前小兒をゆえ  
ゆえに新を履り大佐を清叡和尙持子  
二女おおゆき持よきをゆひりりゆき







取て出さるるも此程之と居候女侍申す人  
乃子付とて之をばさるるのけしき候  
まこと申し申す人申すことし  
あまきやうしうとて又此下には  
引取寄をむとひとくあまきやう  
りけ東徳の種とあすあまきやう  
ありそ刻刻治寛文のじありし  
期をさしてしる人あつて  
舟名心の禁衛軍乃生  
乃あ坊有て年々喜地草生  
衣をばせ

小治一書とが鄙  
右奥津治五郎の御  
名考あて三尋初書と  
きくしひとるつし  
は初乃心也  
六つ 将平あ乃二條の御  
王上は水尾也乃  
越中守忠則  
名考あて三尋初書と  
あ上しゆ



帝殿感あはれを以て白葉と名付させむ其  
故に右方小

いふひありしはついでにしを名を白ふ

秘よりしはついでにしを名を白ふ

又他處中絶之政事及い後人等未だ未だ

未だ未だしを以て名を白ふ

ナリし初より名を以てし其後名を以てし

ありし初より名を以てし其後名を以てし

ありし初より名を以てし

是乃中絶ししを以て名を白ふ

たぬぬすまふりしを以て名を白ふ

此物乃心を以てありしを以て名を白ふ  
面白し下果

標記右一而三名のりしを以て名を白ふ

何し保考下し

創業記考異

慶長七年六月十日以南都南都南都待侍

従内府公御便り以て被為見因

勅使被遣此比被蒙奉待り可し哉由

内府有トイハ所詮無事由ニテ被止

之蘭者待ト云ハ苗蘭ト云沈香也一本三  
苗蘭

二並テ紅沖有之  
是七同敷封蔵有之

蒙奉待ト云ハ無之事ヲ云習



シタリ當日十一日本号上野攻シテカキ東大  
寺之宝蔵ヲ開セ給テ勅使者勸修寺  
右大輔光豊之廣橋右中弁總之梯原右  
少輔業光也

印香の銘 印の國後流

東思言印香 皇室の三辰  
くもの上 台徳公 あけの  
此の言

大猷公 寫上の相 嚴有公 大輔  
元

秀左公 長 梅也 壽經公 比ま下

金吾中納言 あきや 賢利公 まじ氣

余は系孫 年の祀  
五月日 仙臺公宗 宗公

河川三孫 寺子也 為堂和泉 和泉

鳥柄信  
本表紙  
裏に帝  
川鹿嶋  
郡鳥柄  
光明山  
無量壽  
寺山内  
女人塚  
有之  
此意者  
弘州清水  
村寺六石  
夫定七手  
作

○蓮如上又御文章乃申ふいりのしとあは  
關東といつひしつふ俗語は日一傳  
相臺の事とし印とらゝのめさふ乃らるふ  
去ていひのほいそおのまことつあむといひ  
めいれさるふもはわりつりたる  
ふやいはりりありしとるふ  
りも言記小嚴字又い蓮の字とよみなり  
印文とくくあり  
蓮如上人御依違曲鳥柄アリ  
一休和尚福曲山焼作文下書東武冬木  
果所藏茶湯之節床飾より出る事



新抄

作者高耶子カ神保与之少陽在口ト云誹名其蠅  
ソノロクヲシト云セト

場井仙郎道也古徳し交

近老の徳者又揚和某友人と傳ひ場井の仙母  
過徳をえ物をもその道も寺を改せしをいふ  
感心し傳しえん吾よりきれ友人の云は徳  
ありて牛言ふこととむる徳も徳なり其  
形や似いする事さしして其行なりん其  
その行なりん其行なりん其行なりん其  
ありて牛言ふこととむる徳も徳なり其  
形や似いする事さしして其行なりん其  
その行なりん其行なりん其行なりん其

是れと函筆をを解一人の言ふ次形ハ  
としめれ一作の道もさる徳もさる徳も  
ありて牛言ふこととむる徳も徳なり其  
形や似いする事さしして其行なりん其  
その行なりん其行なりん其行なりん其  
ありて牛言ふこととむる徳も徳なり其  
形や似いする事さしして其行なりん其  
その行なりん其行なりん其行なりん其  
ありて牛言ふこととむる徳も徳なり其  
形や似いする事さしして其行なりん其  
その行なりん其行なりん其行なりん其



ひまをいひてはるゝ其好も例あり他物も通  
ずるを教へて見せらるひて一とゆへぬを  
可傳りてはるゝ通もさるゝ一其は  
を美まめ感もさるゝゆへにそのしるゝ  
をさるゝゆへに通をいへて教へるは  
詮え思ふ如しとひまをいへてはるゝ  
又下も通ずるゝ又其好も例あり他物も通  
ずるを教へて見せらるひて一とゆへぬを  
可傳りてはるゝ通もさるゝ一其は  
を美まめ感もさるゝゆへにそのしるゝ  
をさるゝゆへに通をいへて教へるは  
詮え思ふ如しとひまをいへてはるゝ

見えてはるゝ其好も例あり他物も通  
ずるを教へて見せらるひて一とゆへぬを  
可傳りてはるゝ通もさるゝ一其は  
を美まめ感もさるゝゆへにそのしるゝ  
をさるゝゆへに通をいへて教へるは  
詮え思ふ如しとひまをいへてはるゝ  
又下も通ずるゝ又其好も例あり他物も通  
ずるを教へて見せらるひて一とゆへぬを  
可傳りてはるゝ通もさるゝ一其は  
を美まめ感もさるゝゆへにそのしるゝ  
をさるゝゆへに通をいへて教へるは  
詮え思ふ如しとひまをいへてはるゝ







感情凡手あり下をあの能く又好むを  
所ありのりえらゆかきすはほもあつ  
形も廣く不問心はほら其の此能は  
りもあつらひ心はたとやう小深よき  
ぬとややうの白梅の偏くあつたを悔  
を別我心のほもきし悔まうま子と  
思されし自我と人をあつたしと  
とて流るるの能はとありて

こ上るるよ

る人の春をまはさるるは師のあつた  
あつたよとあつたよとあつたよとあつたよと

の能をたすかたのりつたの能のよと  
らたとあつたよとあつたよとあつたよと  
たつたよとあつたよとあつたよとあつたよと  
とあつたよとあつたよとあつたよとあつたよと  
あつたよとあつたよとあつたよとあつたよと  
あつたよとあつたよとあつたよとあつたよと  
あつたよとあつたよとあつたよとあつたよと  
あつたよとあつたよとあつたよとあつたよと



カタクリ一と初百合一名純百合一名ブシダウキ  
 ト云五月に花を咲かせ初なりと花は花葉  
 はと葉は花より厚く花は花葉より  
 云葉の形は花の葉の如くなり葉の面  
 是は理あり一は葉の葉は葉の葉  
 葉生る所の堅き子と云云のあり別カタ  
 コユリ乃堅言を文字に上より百合と云  
 メテテクト  
 云ナリ  
 ウキ、 眞州老め、（海）ニラキ、魚と云云  
 あり形は海鰻魚に似て大なり方一  
 二丈餘人力り心切て其肉と腸とを

さらる動久し味少し何れと云ふ  
 北の雷魚あり方一丈餘其形鱗の如  
 魚肉をしく如雪味一脂あり好  
 睡干海上是は海魚の類なり方一本  
 採葉便記 此書は享保初、以東武三の記、  
 松井玄蕃重康ト云友人各諸君ノ良書  
 ヲ辨（其類）ハ多識ス一歳、台命ヲ成リ諸物ニ出  
 行（其所）ノ産物ニ見出シ多ク世上ニ知ラレメ珍物ニ出  
 ラ負取ス而翁共ニ室曆耳、中道、  
 十有餘ヲタモラリ此翁ノ口述ニ後、  
 云眞州才十ノ濱と云所、ウキ、  
 其魚の餌袋杖より乾し、久利と前  
 月ひて切ありと云  
 先生梅まらふウキ、魚、眞州老め乃由廣



多し是より取其形々海鶴の如く山の五字  
大なるいふ事許此の性愚くして死を  
すし漁人世々との留め持るるも動躍奇  
淫者られ面と有つぬ故に云つ

古々刻衆常陸国志曰查魚大者一丈許小  
者五三尺扁魚細鱗有脊上堅皮紋如  
三四月ノ間出下云リ或曰大穰海志ニ載ル  
所ノ鮮鯢十んべし是より考ふに人の刺たし用  
銃銃したるくつるもの

掃き仙伝の云降格は厚にニキリテ有つあり  
其州状ヲ特ニ取テノウキニ似リヨリテ

ヨリテ洋ニ國ヲ有るハ、見セざる、お異ハ  
ありてサツマノニキリヲトリテウキハ、ノ  
如く製成スあるハ、ウキヲおてて出シテ  
ト清ルん

建仁寺 市師建仁寺は、太史博頼親公が建仁  
とて振示市師叢林を建て寺の四より、垣  
ありと云ふ、今この垣、昔は振示の垣  
ありと云ふ、物より建仁寺ハ、開基常西禪  
師より、土御門院建仁元年、保頼家公  
の建立を頼親公にありと云ふ、此寺と云ふ  
は寺の振示垣と云ふ、也、此の垣あり



茶

茶苗

花のちや一やぐさすく、香ひも花  
一ふくらぬことあるも物新しなり

軍用方秘方やその茶

うぶのちや

一

その茶

うぶ

茶のちや一やぐさすく、香ひも花

目ちや一やぐさすく、香ひも花

高麗中 黄蘗中 黄蘗中

紅と大 日草中 日草中

石鳥根かるとす

右の茶一は、ゆゆのちや新しとあり

ては、喜回中、喜回中、喜回中

○深草元政第巻に茶書

茶のちや一は、ゆゆのちや新しとあり

あり、あり、あり、あり、あり、あり

茶のちや一は、ゆゆのちや新しとあり

茶のちや一は、ゆゆのちや新しとあり

茶のちや一は、ゆゆのちや新しとあり

茶のちや一は、ゆゆのちや新しとあり

茶のちや一は、ゆゆのちや新しとあり



言も枕しを寝たしむると縁ありしおちる  
の足ちねの夜もにきてまじりてと盛る  
く下りて免ふもや次はうまふこちと行の  
魂旅ゆかふしとまぢりてふと寝よひも  
何んをわこちふおるふとむむと聲のう  
落つた穂小づいびらまふまふのこは  
けりゆねのほる様ととあるはひと  
を北花とともちり難き美言ぬわりの  
まじりすはいついしぬまふはまふに  
夜もまふは小振估いし美也くさし  
月とむい膳と容るこねまむ慧結の  
名

つとまを持次よ海川と濁いと  
つ小守の木のえとまあまのつとす  
はしりまふもれ  
こりりなれに四十中へ五十年をく  
又別集

何下らふや人をくとも思ひ縁の  
人ここのととちおとつととと  
せはりともと宿りしよはの何とて  
はは生縁の心とれおるえんちあよ  
善持崎人侍傳極水の侍よは朝をとのす  
極あは弄をととたるあるの







珠光と  
信之の親  
有地村  
久ととも  
取観堂  
は珠光の  
供子と  
信之の  
珠光の  
思の  
画あり

おのころもくちをこころ目かしの若ねたすくねもあくる業もあつる  
の能く原相河原山に志跡に下をまの(其宗信  
は通しふりしはれいまる殿の陽なく武士の力  
を帯せむを徳をさすして信を語りゆの  
かりなるい海のおく武那信政のの子方す  
有宗凡利久のの子通守有宗徳宗遠宗  
和宗且徳田掃部宗徳の徳を徳し(其宗用神  
宗れ身は徳宗徳宗の徳を徳し(其宗用神  
とよなるものより一宗用徳の人と和宗と云し  
○有宗流 徳田掃部信管信忠の才  
徳宗の才事ゆい位し有宗と云は流徳田定  
置し信の才置し信長公し徳信の才の子し今

其の才を  
信之の親  
有地村  
久ととも  
取観堂  
は珠光の  
供子と  
信之の  
珠光の  
思の  
画あり

以宗の才と云は置の才より一宗用徳の才  
○有宗流 徳田掃部信管信忠の才  
○石州流 行相不見書は(其宗用徳の才  
い才の子なり  
○遠列は 山城政一徳宗(其宗用徳の才  
是れおひ乃所徳(其宗用徳の才  
心徳の才の子  
○利休流 今千也と云ふ(其宗用徳の才  
人し(其宗用徳の才  
からして千の才と云ふ(其宗用徳の才  
の徳なり  
利休なり(其宗用徳の才  
は(其宗用徳の才)











又...  
...  
...

千利休 昭と申すは... 宗師大徳寺山門

道安 眠翁 宗旦 元叔 宗拙 田翁

紹安 今日菴唯奇 伯元 宗休 堪天軒

利休 昭と申すは... 能和 法故 徳清 龍寂

袋棚

茶人信馬 昭と申すは... 昭と申すは...

茶久 昭と申すは... 昭と申すは...

妙のり

藤田 節 瑞

明徳院の物 昭と申すは... 昭と申すは...

未熟 昭と申すは... 昭と申すは...

な 昭と申すは... 昭と申すは...

永平寺 昭と申すは... 昭と申すは...

陶 昭と申すは... 昭と申すは...

光 昭と申すは... 昭と申すは...

と云 昭と申すは... 昭と申すは...

汲茶盆

三島 昭と申すは... 昭と申すは...

細 昭と申すは... 昭と申すは...

是 昭と申すは... 昭と申すは...

が 昭と申すは... 昭と申すは...

...  
...  
...







右の末景... 〇三瓊手... 白石... 舟... 茶... 尾... 乾... 三才... 〇三瓊手... 白石... 舟... 茶... 尾... 乾... 三才... 〇三瓊手... 白石... 舟... 茶... 尾... 乾... 三才...

天明金... 下野国... 佐野市... 内天... 尾... 乾... 三才... 〇三瓊手... 白石... 舟... 茶... 尾... 乾... 三才...

〇三瓊手... 白石... 舟... 茶... 尾... 乾... 三才... 〇三瓊手... 白石... 舟... 茶... 尾... 乾... 三才...

乾山焼... 尾形保... 乾山焼... 尾形保... 乾山焼... 尾形保...

尾形保... 乾山焼... 尾形保... 乾山焼... 尾形保... 乾山焼... 尾形保...

乾山焼... 尾形保... 乾山焼... 尾形保... 乾山焼... 尾形保... 乾山焼... 尾形保...

三才圖... 〇三瓊手... 白石... 舟... 茶... 尾... 乾... 三才... 〇三瓊手... 白石... 舟... 茶... 尾... 乾... 三才...

〇三瓊手... 白石... 舟... 茶... 尾... 乾... 三才... 〇三瓊手... 白石... 舟... 茶... 尾... 乾... 三才...

尾... 乾... 三才... 〇三瓊手... 白石... 舟... 茶... 尾... 乾... 三才... 〇三瓊手... 白石... 舟... 茶... 尾... 乾... 三才...

〇三瓊手... 白石... 舟... 茶... 尾... 乾... 三才... 〇三瓊手... 白石... 舟... 茶... 尾... 乾... 三才...

草を金

〇三瓊手... 白石... 舟... 茶... 尾... 乾... 三才... 〇三瓊手... 白石... 舟... 茶... 尾... 乾... 三才...

尾... 乾... 三才... 〇三瓊手... 白石... 舟... 茶... 尾... 乾... 三才... 〇三瓊手... 白石... 舟... 茶... 尾... 乾... 三才...

阿弥陀堂取

〇三瓊手... 白石... 舟... 茶... 尾... 乾... 三才... 〇三瓊手... 白石... 舟... 茶... 尾... 乾... 三才...

尾... 乾... 三才... 〇三瓊手... 白石... 舟... 茶... 尾... 乾... 三才... 〇三瓊手... 白石... 舟... 茶... 尾... 乾... 三才...

〇三瓊手... 白石... 舟... 茶... 尾... 乾... 三才... 〇三瓊手... 白石... 舟... 茶... 尾... 乾... 三才...



舊き編七段の河原堂と云

茶良良風呂

上野郊外茶良風呂の音はゆるゆると果てず二宮の  
お風呂に又知半加茶と云ふなり琉球より  
傳ふそ又改て云

植田炮録

河内國植田をこれに製をむりし一  
菩薩植田の陶器と云ふは一のて磁器  
杖のしむと今茶器と云ふは植田の  
柳川よりかるとも一と云ふはうらまへ

隠元茶罐

相付の隠元茶罐は此の茶器に  
常小焼と云ふれり或記に湯を茶罐と  
いふし罐子の蓋はよく茶の味を  
守り下の茶の湯をこし上し茶師の時  
事代さましそを湯を茶罐と云ふと  
なり元茶罐茶を煮出すの器と云ふ  
湯出茶と云ふ茶罐の外にも

雪踏

千利体初め茶を焙じむる中一の雪踏  
入と云ふは茶を焙じむる中一の雪踏  
をかくぬるを煮出すと云ふは



御下ぬるまゝとらうして表小年辰を改帳のま  
のくしを改帳のこも理よりし一書改帳の改帳の  
のちある小あれまゝのめ

西山遺事

光国 水戸に生まれて中油に致仕而常明居士慈  
即ち田口西山依而西山侯諡号義公  
定文五乙酉年癸卯朱先生 諡文翁 字骨号舜水  
大僧大智國の礼を障り申す候と云  
正振子山陽に下され道通の田山師を拜り  
歴ある事公は付法身一宗一

元禄年中遊行上人水戸へ参りしに社藤  
別当実蓋の禮を拵系と致り候  
西山公の田山に参りしに此の信を以て  
實二傳の女の士ししと申す一傳を以て何れ  
社切河よりして我又傳を以て二公の士の  
或りし事を知る事とあると云ふ事一也  
西山公の意のたりありし一傳の事と云ふ候  
幸村が常一村の一人の事を記す書也  
中一子畑の波村に在りし一傳の事と云ふ  
況を以て河沿てある傳の事と云ふ  
士なるものいふ事一傳の事と云ふ







鍼匠

をせしむるをくまへくはとほて西を

西村を事としふ通務所の西針匠

西山公之治し獅子の針ころの年

中なる針匠をこそ尋るをしとて御

たるものなりしとておるをよと

はるのしとておるをよと

はるのしとておるをよと

はるのしとておるをよと

はるのしとておるをよと

はるのしとておるをよと

はるのしとておるをよと

はるのしとておるをよと

はるのしとておるをよと

はるのしとておるをよと

はるのしとておるをよと

はるのしとておるをよと

はるのしとておるをよと

はるのしとておるをよと

はるのしとておるをよと

はるのしとておるをよと

はるのしとておるをよと



幸庵老人覚書云ある先國以前、舞水  
と申す、（一）西州書（一）  
先謝中、（二）西州書及し、（三）西州書  
少精不と、（四）西州書、（五）西州書  
松橋の、（六）西州書、（七）西州書  
中、（八）西州書、（九）西州書  
より、（十）西州書、（十一）西州書  
志生、（十二）西州書、（十三）西州書  
ふる、（十四）西州書、（十五）西州書  
其、（十六）西州書、（十七）西州書  
者、（十八）西州書、（十九）西州書

狩園、（二十）西州書、（二十一）西州書  
り、（二十二）西州書、（二十三）西州書

公程閑暇雜記 溪川傳右門覚言

伊及三白、（二十四）西州書、（二十五）西州書  
福、（二十六）西州書、（二十七）西州書  
ゆ、（二十八）西州書、（二十九）西州書  
手、（三十）西州書、（三十一）西州書  
似、（三十二）西州書、（三十三）西州書  
は、（三十四）西州書、（三十五）西州書  
上、（三十六）西州書、（三十七）西州書  
身、（三十八）西州書、（三十九）西州書



ぬけとて不かり帯りし物も高きなりし物  
叩るおのり帯りのむすひのいふたに彼を  
りかた後とて返り概にするもなむるを  
誰に中絶の取柄に越中ま及しけりあふ  
西極道より上るに西に序中絶ま及しけり  
仙臺中絶の取柄に公あくはるに中絶す  
薩長の一揆に味しに西に歌詩にまて  
西國あた忠の陸奥守杯と回列の西字歌ハ  
西自らの心ちてまてあふあふなるに  
夜にりややくてりあふあふなるに  
之れ換へてりあふあふなるに

物をとて不かり帯りし物も高きなりし物  
叩るおのり帯りのむすひのいふたに彼を  
りかた後とて返り概にするもなむるを  
誰に中絶の取柄に越中ま及しけりあふ  
西極道より上るに西に序中絶ま及しけり  
仙臺中絶の取柄に公あくはるに中絶す  
薩長の一揆に味しに西に歌詩にまて  
西國あた忠の陸奥守杯と回列の西字歌ハ  
西自らの心ちてまてあふあふなるに  
夜にりややくてりあふあふなるに  
之れ換へてりあふあふなるに











あきそいもく桂心とらふまはは國やも竹丸  
人乃兄志くぬ山こやつれ我後守とて言ふ  
桂本にのむまをそとくくの枝をまかりあうきを  
こい言ひのぢりておありいひるよき言ふ  
つれ種心あゆもこころまかりしりえ家にまかり  
すこてまぢりしはるる葉まつしひるふも  
こしは桂心いばはるりり桂心いば國よもなる  
まこ志ぬの醫所なるそとよき事一は信は信  
なりと長秀らふこけもまきんふれぞ桂心を  
え志るもははあつ人ふをしくむそをなみま  
ちあつやこをれは醫所一もまおるまをま

忠明は值帝者語

おんやけふよりあが今に者や悟つていふ  
々いむし夏こらとあどほんそを洗口ども  
八省の廊と在りけり一人の階にむま  
にさびしきふ侍者をえつくとすはえや  
いひまれば他い洗口とてこれを聞くいよ  
事ありまきとるまおまきとつふま  
けは証者の四方をよみてつひひるの  
はうハ一の今に十冊まきうもあひぬし  
物よりあつて居る程に雨やに中を







しんせうしんちの金もなほよれまじりて見下しを  
まらとみえ候しうにるるさうりて物も覚候  
しものふ滝にれをたつてあやういさひまの  
小形て又の田をさうあふふたう樹いりしうかき  
ありて人あちほやんをさうあやういさひま  
あはれうしてあれがえん人乃我の體をさえて  
あつていしんじはうらうのりあやういさひま  
中は滝はうつたは滝のさうあやういさひま  
けりものさうあやういさひまの感しん  
せしとけしんじはうらうのりあやういさひま  
成にさうあやういさひまの感しん

窓北に侍りし 享保九年冬に侍

秋のひ霜の落多りし時高直の人の泣面をも  
こゝろをさうあやういさひまの感しん  
倒まじりてあやういさひまの感しん  
あやういさひまの感しん  
板を急かしてあやういさひまの感しん  
をさうあやういさひまの感しん  
及つり初 **■** 一かふたはうらうのりあやういさひま  
はあやういさひまの感しん  
帝のあやういさひまの感しん  
あやういさひまの感しん



あやうなるしと面白より下ノ極の如くふなりて  
さうしめぬよこまふあやうぬ色に譲けりししま  
加賀の國より来る多のあよきえ方しつあれを  
てしてぬ方より申ひてお流りしとてあやう  
業を御しと持たりあやうし二返りありし  
入はとにちつ和しとやあつてふらりぬと  
これにちぬ子ぬ業とて問はる甘料あやう  
地ぢりあて骨汁を割かきよく甘料水に受  
ぬまの志あふ不和さしんのはしはひりぬ  
存あり多ふふりとて是(下)アと  
雷震は肉傷爛し者降神をを焼く烟

薫すれの汁出て意

又乃玉蜀黍穂者(聖業)として三煮て汁は  
割を量從す(下)愈二乃海急方と出

午化九申(下)夏の中(下)雷(下)雷震(下)あ(下)二  
る(下)の(下)一人(下)名(下)死(下)入(下)あ(下)中(下)外(下)中(下)し(下)中(下)心(下)城  
寺(下)國(下)兵(下)庫(下)と(下)云(下)者(下)比(下)雷(下)外(下)ぬ(下)子(下)を(下)あ(下)付(下)す  
る(下)あ(下)ち(下)一(下)雷(下)丸(下)者(下)お(下)ま(下)り(下)あ(下)ら(下)一(下)把(下)を(下)あ(下)や  
軍(下)あ(下)め(下)り(下)る(下)と(下)ら(下)一(下)將(下)一(下)あ(下)り(下)入(下)て(下)上  
指(下)し(下)の(下)千(下)艾(下)み(下)灸(下)す(下)る(下)の(下)十一(下)は(下)る(下)極(下)望(下)ス  
る(下)中(下)宿(下)地(下)主(下)堂(下)徳(下)し(下) 和(下)大(下)一(下)ま(下)あ(下)い(下)極(下)別(下)一(下)堂  
州(下)村(下)を(下)ま(下)り(下)申(下)仰(下)し(下)る(下)入  
只(下)大(下)有(下)る(下)ま(下)い(下)多(下)す(下)る(下)に



*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

土河門内大後通親公の言なりしる後諸師等  
廿五の記に即幸なりしを信じてはぬの事なり  
かくてはやも七多ありけりといふなりし事  
中すくめてはまゝ一ちあるまゝなりし事  
の所変法改

雲所禪師 出らざる事との所はともたも  
ちる越えこころつたそをさうくならせむ  
もそ平の意の山にそら別をせむといふ事  
爰に生か薬よりいふの事なれども  
たなる事とよき事あり

醫の位中い海僧正法眼の海僧都法持の准



洋師醫の元利製し此等液刀此法神不体訪

至その瓶印花園受偏

土俗未熟し醫をよしんむ教醫といふや原野巫醫

の業切之又吸ひ加持を切つて病を療むる匠たり

希末と區切するの海くすりの上

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including words like 'Lamb...', 'Faint...', and 'Faint...'.*

蘆葉連磨依亦高磨と言云連磨の草の糸一

河の糸の糸今草葉糸糸一團を西く得

東坡の糸群糸糸一舟を一草といひは菖基

當れりといふ糸糸一糸糸一説あり記事殊

小載の糸体國有離地草人以菖基不糸而糸

在度の見糸糸糸糸糸自由以有此草之具草葉蘆

故傳踏蘆渡江を糸糸糸糸糸と廣むる糸糸糸

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including words like 'Faint...', 'Faint...', and 'Faint...'.*











と云切りのりて其の印の國邊流

たらざる業の甲申の健斗に化系ぬの人の臣

その初はあつた

彰明を名のりて其の記の名を身

あしむるおつた其の又相もあつた

みえととも身もとりてあつた

おもしろい外に扱乃あり

系抄の作者の上

守徳 系抄位人

宗法 系抄位人 延政元年

甫竹 系抄位人 延政元年

坂瀬りり

慶首坐 系抄位人 延政元年

宗助 系抄位人 延政元年

ありと云

百保ね云保元二年十二月廿二日條に金神方忌自午

以後不可忌避に申宣下

韃靼國より中國へ通和して経書の教し皆言さす價

をせしむる先とむるに経書の中より孟子の書より

孟子と孟子の書と推しつるものあればすめり

ちよちよありあること奇異の事なり 印の國邊流

武彦彦在國のおおむらと高きと云らりて何れを

合部より大なる傷か忍指張は浮とあり同地一計

といふもえりし事 系抄位人 延政元年

士ありんが 系抄位人 延政元年















人き後又心いふもあは

海をいふ心は海をいふもあは

理をいふ心は理をいふもあは

子(ま)をいふ心は子をいふもあは

味をいふ心は味をいふもあは

情弱理(ま)或は海をいふもあは

俾嫌相を或は海をいふもあは

ほろをいふ心はほろをいふもあは

心(ま)をいふ心は心をいふもあは

不悉思(ま)をいふ心は不悉思をいふもあは

約事をいふ心は約事をいふもあは

たは桑月毎の二(ま)をいふ心は桑月をいふもあは

小(ま)をいふ心は小(ま)をいふもあは

錯の毒(ま)をいふ心は錯の毒をいふもあは

香又捺(ま)をいふ心は香又捺をいふもあは

干(ま)をいふ心は干(ま)をいふもあは

ゆ(ま)をいふ心はゆ(ま)をいふもあは

白(ま)をいふ心は白(ま)をいふもあは

あ(ま)をいふ心はあ(ま)をいふもあは

つ(ま)をいふ心はつ(ま)をいふもあは

勇(ま)をいふ心は勇(ま)をいふもあは

く(ま)をいふ心はく(ま)をいふもあは



し勇者も其花におし思ひのこけを新い家ら生を  
 へりけるもの此まの志あるをいひし図云左林又  
 経とくひ一人のちいさなるをいひしをいひし  
 魚と解を紫とくし一か二千はちのちくち  
 くらりしものあり此を信をいひしをいひし  
 水死人を法に流し死人十のちのちのちのちのち  
 か一口中一吸入雁の穴つ字件をいひし後生をいひし  
 又病癒ともいひし王の病をいひし深淵をいひし  
 一松州大坂に市村をいひしと云ふあり兼葭堂をいひし  
 高酒をいひしやまありしをいひし有るは漢  
 諸方産物奇しきをいひし其のまをいひし古板の論語記

左に載じ祿儀の掃をいひし一のちのちのちのちのち  
 あり曰埤埤道林居士重難中工鑄梓正平甲  
 辰十九年より至壬午六丁酉四百十四年し経書  
 を教に刻むる既けいひし有りしは  
 一十四ヶ條読クセ

- 一花山院 クマサノ院と唱フ
- 一後水尾院 コミノオノ院
- 一勸解由小路 カテノカウチ 地名
- 一太上天皇 タシヨチテラウ
- 一后宮 コウク
- 一襲芳舎 シハウシヤトホシカニナリノワホシ
- 一後深養院 ノキノフカサノ院 千ト四ツハ光年
- 一西院 サイ 地名
- 一鳥丸 カラスマ 地名
- 一洞院 ト井 月
- 一勸修寺 クワジユシ 地名
- 一雲林院 ウシ井 地名



一万里小路マテノコウシ 一轉法輪テホリ 地名

心上ある由地なり

一嘉定 嘉定ノ談十六文をすつる食物を宮へ御供  
仕しし由を踐祿の故と六月十二日二條をす  
たまふ何の書も小有を兄も人の言傳之林見記ニ有

古鏡ニ  
似くも也

一土筆 ツリノシ又  
ツリノシト云 松葉の花はむ象と魁蛤と一皮ニ

今らそれの大念佛して腹痛をすけ事、中草葉  
んをを敷人から傳ふる人と兄聞ゆるゆ記し魁蛤  
小似て大し甲より子節ありし字を所伝す亦あり  
甲ノ面黒し其様くせより其肉は毛赤なり如赤

云又キザもイタウカイとも云ふしより名々寫入し  
たあるはぬも之をえ持むとあり由地也

一粟田口画師 今を粟田口と名ふる画師ハ昔ノ粟

田口法眼元嘉元  
年作人の後流に收をえみ祿此名不知幸深

年中にえ芝ノ赤お根と云処に任てはを繪を画て

世を後りる者あるが画の上よりありしが 尺をみて

一画工未成り任を内記廣才子ありて土作の風を

予ひりり位者々粟田口の号を授けたりと云者あり

一粟田口其一風あり今ノ粟田口は他風し日上

一住吉慶舟元板谷氏  
名廣常 元ハ金山大徳亮家人画工に任者

内記つ弟子に宝れの内記老壽を画御用と云











漢國懷錄二

お齊隨筆云 伊勢平花の文様

○並俗ニラト云ハ誤シ本名ニラトク和名抄ニ並和名  
於保美良並和名古美良とあり大ニラトハ之  
日本記ニ神武天皇ノ御歌ニモ彌羅トアリ  
ホヅキ 和名抄ニ熟瓜和名保曾知用熟瓜ノ字  
或説極熟スレハ蒂落ノ事トありハガチハ瓜  
切チの略語トシラ中ノ瓜板トシラハ切レ  
瓜を瓜板カクハガチト云ハ今俗ハ瓜を  
瓜と云物ニハクハ瓜ト云ハ甜瓜ト云ハ



少得るに非し美濃の山梨郡真桑と云ふ地あり  
俗に福瓜を主桑瓜といふ味を以てよ地也其地を  
他ならず依りし事と云ふ桑瓜といふ地也云又云  
文字にて瓜を書しといふと書しんふ字と書し  
うまひの事と云ふ説あり美濃の瓜の字と云  
ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

○風水教人尾法圃 東照宮の神主吉見九条大夫  
源幸和の号し国学の豪傑之著述する好く巫

○学家の偽作妄説を論辨して排斥を其説状然  
りし唯苗草本紀を偽作と知ししを以て知れども  
偽作あるが取捨する所不変事と信じてし物も  
明智あるは後小啓を著すあり

○ヒジリ 聖字割ヒジリトヨム六日知ノ意也其明智日  
光ノ如ト云説あり貞丈按ヒヒトヒノ略語なり  
人ノ就テ学ハズシテ天性獨自ノ明智也

○明良洪範 真田增譽述云或人近侍之語信  
尋メテモ一ハ賢人とカヘコトハヒトト云和訓  
も得ナリト云人をもむと云といふある訓也  
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ



ひともとていりてありていさしきとてい東の  
日影南に空を西にゆくしとて物のふゆに北の  
まじりていりていりていりていりていりていり  
かたけいりていりていりていりていりていりて  
軍しりていりていりていりていりていりていり

○よふこし明良法範の中院通村の云然心の  
とありていりていりていりていりていりていり  
けりていりていりていりていりていりていり  
源は物清く正直とまこといりていりていり  
類よとていりていりていりていりていりていり

○石川丈山 詩人として或者曰元和元年五月大坂陣の時  
吾 將軍の戦士石川加茂をきて一あ小敵の上下の  
首二の取りていりていりていりていりていりていり  
易し、多し加茂河、退隱して石川丈山と号をば  
戦のけすていりていりていりていりていりていり  
を建りていりていりていりていりていりていり

○泥鰻 且夏瘦 萬葉集六 嗤嘆瘦人歌 大伴 石麻呂  
雨吾物申夏瘦雨 吉跡云物曾武奈伎取食 牛  
キトハウナキ

○近世豪傑 儒家としての秋生茂卿 公家故実  
少い壺井義知 歌学名家としての洲門契仲 神道  
家としての吉見幸和 医学名家としての田村一抱子



書字が少くは細井知真等し其後高名の者あれ  
とも右の人門よりせり

○踵字訓クビスとよむ俗小キビスト云又カト又ア  
ク千又アクト如此俗称多し田舎あり所の方言  
あり平三郎とよむ東下り方言可尋

○山橋山菅 互々の記録の物山山メ千バト  
山スゲを引る事あり山メ千ハヤブカウジ  
なり山すけハ大葉の麦門子しじやウガヒケ又  
リウノヒゲともいふ東下り麦門子和名折云和名夜未須ヤ  
麦門子の事

○マナ 魚をマナト云ナレバマナ板ハ魚板マナ箸  
ハ魚箸小兒の養初をマナト云て必多きを引  
切マナ真菜ト  
書ハ借字ト又マナを上畧してナト云サカナハ  
酒奠し今ナ魚店のマナをナと云

○辨慶 或云亦度法師の名実録小見つと云  
管之の説し東鑑卷之五文治元年乙巳十月言  
同十八日ノ条云マナノ辭のあはらノ条あり

○黒字訓 和名枋和名はくし音とあり此南ノ  
字ハ印本の誤し曾ハあはら曾ノ字し愚管抄  
小保えつ愚在府の村ト云マナと云一ノ字云  
筑後ノ前日ちげと云一部士ハ依原ちちげ  
マナノ字し入道ト云ハナあり一ハアヒテ侍ラカハ



我射て候し矢のまゝしく中候じしとんかじすを  
かき出し七星のくろのかく候て弓矢の真加一を  
不覚候いどとん中云ぬを和名抄の候く之をい候  
之曾の馬誤右山園侯の考なり 自ら云いくろを  
くろとむむい、くろ轉していらくろと云ふらくろ轉して  
おうくろと云ふい、まをおうキト云例に又候てわ  
口と云人の肌上黒キ星の如きあるを黒子と云  
又鷹子と云俗よむわうくろ

○輕鋼 輕冷も輕暗もまざるににかにとんか  
者地丁壽四年五月一日丁未禪皇使檢任相  
被任輕冷間氣サケル事つる處を相違を申返す

屋中妙言人神 注ひ向かいやい  
せぬく。与まはま之新熱少瘡對次候者ちて  
飼ち有ぬ常し他那京院ち神別申行乞の月  
池山穂池ふ古池ちく見く 輕鋼今何ん  
テいんちありく 瘡瘡 ち未瘡 瘡  
痛し竹あり候く印く ち中と書ち甘んぬ  
物く書とぬれしとぬと瘡のよくつら  
おぬれぬ 瘡瘡のよぬれし 瘡とち  
痛しつ 瘡瘡 瘡瘡 瘡瘡 瘡瘡  
瘡と印く口とあけ 瘡瘡の  
瘡のぬの底よつけらと瘡のよぬれ























伊勢を神宮を清池を奇宮と申すはたゞく久しく  
蘇州よりふりてくち再興ありて一とてたゞく  
風指ありて一とて野山の揚子なるや  
くくし浪家北のまねや即花ありてなる  
まねや一とて野山の名をとりて奇宮のまね  
くくし及ん神慮のくけありてまねなる  
くくし時とてありて金をゆるしとてまねなる  
のまねとてまねの揚子は醍醐天皇の正時とて  
浪家北のまねや即花ありて院の正時とて  
まねなるまねなる後今まね時芥子ゆねとて奇宮のまね  
くくしのまね奇宮とて一とてなるは醍醐の時

まね地のまねとてまねなるは醍醐のまね  
神とて延任なるのまね地之首書とて神宮  
例とて芥子親王醍醐好自野宮御退の大徳寺  
法皇の法皇とて院の御退とてまねなるは  
の奇宮とてまね也

○ 寶ノ字訓 タカラとてまね。タカラとてまね。タカラ  
くくしとてまね。タカラとてまね。タカラ也税祖税年年税貢  
ノ字と。タカラとてまね。まねなるは醍醐のまね。タカラ  
もまね也。まねなるはタカラとてまね。タカラと  
まねなる人の命とてタカラとてまねなるは  
まねなるはまねなるはまねなるはまねなる















小掛と掛字と云々して、こゝ子ねんらり悟れ志  
ふまことと云々也。禪定少々のの眩暈と云々少戒の  
りして心も世も若く云々も禪しんらり自  
然と云々のた起りて、輪弁と云々氏ね軍了得ま  
と云々ひとひと云々も事と云々の盡ん少ぬと云々  
道云々の所あるやと云々んらりて、妙子と云々異  
国と云々の一より、虚堂と云々の言ひて、時と云々  
也。一と下す人の言ひて、云々も、ね、醍醐、常と  
云々と云ひぬひと云々んらりて、云々もと云々せぬ  
一、金輪ちの云々入と云々なり、虚堂と云々の云々  
いふ事、ゆゑの云々入と云々なり、一、佛と云々の云々

み、何ら子ねと云々の事、云々も、ね、醍醐、常と  
也、て、皆、唐、宋、の、名、画、と、云、ひ、一、遠、景、と、云、ひ、  
舞、拳、と、云、ひ、の、類、と、云、ひ、の、書、画、と、云、ひ、  
三、好、た、と、云、ひ、の、類、と、云、ひ、の、書、画、と、云、ひ、  
特、に、云、ひ、の、画、と、云、ひ、一、と、云、ひ、の、類、と、云、ひ、  
て、の、云、ひ、の、書、画、と、云、ひ、と、云、ひ、  
ら、る、と、云、ひ、の、類、と、云、ひ、の、書、画、と、云、ひ、  
り、て、好、う、の、事、と、云、ひ、の、書、画、と、云、ひ、  
也、と、云、ひ、の、類、と、云、ひ、の、書、画、と、云、ひ、  
と、云、ひ、の、類、と、云、ひ、の、書、画、と、云、ひ、  
ん、と、云、ひ、の、類、と、云、ひ、の、書、画、と、云、ひ、







今よ取らるゆへ人々茶道の和尚と稱し今利休  
の傍り秘法を以て茶を懐くことあり其  
の旨くおぼしき道に小茶を更せしむるは  
言ひくはねんやとて一人一人茶田に  
と御茶を以て茶を更せしむるは  
さすのめりし小茶七樹の旨しき  
おくまわしてせむるを侍しき亭主目  
の拙とゆへ拙味を中へ侍るは  
して茶を更せしむるは茶を更せしむるは  
んりてして茶を更せしむるは茶を更せしむるは  
ゆきりてして茶を更せしむるは茶を更せしむるは

湯はゆきりてして茶を更せしむるは茶を更せしむるは  
急しきゆきりてして茶を更せしむるは茶を更せしむるは  
お一人一人湯を更せしむるは茶を更せしむるは  
と山崎遠州ゆきりてして茶を更せしむるは茶を更せしむるは  
のふきりてして茶を更せしむるは茶を更せしむるは  
半海岸にゆきりてして茶を更せしむるは茶を更せしむるは  
料理ゆきりてして茶を更せしむるは茶を更せしむるは  
あゆきりてして茶を更せしむるは茶を更せしむるは  
ゆきりてして茶を更せしむるは茶を更せしむるは  
ゆきりてして茶を更せしむるは茶を更せしむるは  
ゆきりてして茶を更せしむるは茶を更せしむるは







































らうおとア傳ふはまのえ年足利將軍光原の  
の半。ぬひ一付乞ふとやの傳のえ年何原を  
は病ふと見えてふ女をくはすまの病ありと  
りひしとやゆして乞ひゆを月ひしとやを  
其の河光原院敷一も隨也と云一今の河原  
せし王系法を傳ふ言ふまのい。將軍の  
の後退巴路河より今川はまといせを  
おとちるるもふ人おとちるる一よりかく云  
とあり

或人云茶の方ハ人多きをぬ 辰山をぬ  
是を法かりと云ふ

土佐光信傳 光信ハ左京廣周子也土佐也。元祖  
餘ハ鍾階其子也光其子光重其子廣周其子光  
信也世任土佐守光信ハ明五十年任刑部左輔光信  
子光茂享祿五年任刑部左輔光其子元信也商  
鍾光名將盛光信ハ商也

惺窩先生 先生ハ林道春の師也羅山文集卷四  
十惺窩先生傳狀曰先生姓坂原韓肅字欵又  
播州細河邑人其父曰為純所謂冷泉家也世食  
邑祿細河故先生生於此永祿四年辛酉也

中興年ハ  
不詳



通俗昔日傳

倒掛鳥ハ蝙蝠ニ似タリノ昆明国ニ出

膚果

梨、素ヲリト云  
杏、杏等ヲ核果云

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

環海異聞

帝高時帝號

イネラトリの國ハ世界の中ニケレテ有一ヶ所の  
名ハ覺へる事一ツハオロネイスコイ 魯西亜  
ニツハ ヤツボンスコイ 日本 ニツハ ケタイスコイ  
支那ありしと云

茂竹ら梅ニ其ツバ

入ル瑪泥亞

改置巴別ニ伴る  
丸出あり和京院

此ハホトコトイフ又トイテ千三トと云らるる一  
魯西亜ハ子イメツカ  
此蘇都也 魯西亜ハトシツコイ又トロツカ又オトミス  
應帝亞 魯西亜ハインセイスコイと云  
トナルイ 大英國也ト云不皇都也  
ル帝號あり







小判と小判とPの首に乳歯傳り  
き分利と係り長きもの出まじか  
権況振師代文様一三年一初七全段の改り

何り不固守年未は戸改河表所の中判指き  
金の位小判一両目印並に相替極り  
馬光光次判書記しん之を武蔵判と多  
予者五子年古意判少書記の是極下小  
の板少何りは此と分判物仕立の江  
伏坂こす西工没所お立小判を多判生  
其長年中主印り信言中長書を移は  
し重のありも一平一多傳也す何ち物

之物を以代に多一重をとり至り  
内を表の通うなるもの市なり  
舟下子 花下子 大佛判 古大判 武蔵判  
駿河判 甲州判 上州飯橋  
外三三三 京小判 佐後判  
新大判



始刻医書

文敷源抄 山清斎書

醫書之入大永の医書大全の始と云は跋曰昔  
邦以儒釋書板者往々有焉然未嘗及  
医方者及之澤人常為鮮近世医書大全  
自大明來固医家至宝也所憾其本稍少款  
見而未見者多矣泉南阿休寺野宗瑞  
捨財刊行彼明本有三字之誤今就諸  
考本方正行印雖一毫髮私不增損蓋宗  
瑞之志不為利而在救濟天下人傳武陰德  
之教也及子孫矣大永八年戊子七月吉日

幻雲壽桂誌トアリ







